



〔写真上〕創一朗君(左)と悠一朗君の兄弟。君の椅子のデザインは毎年変わり、その年に生まれた子にだけ贈られる(東京都世田谷区)。(同右)椅子の裏には持ち主の誕生日と名前が刻印されている

持ち主の心も支える my own chair

「大臣の椅子」と言えば、意味するのはもちろん椅子ではなく大臣の職そのものだ。椅子を見るとその持ち主が想像できることから、椅子は道具の域を超えて持ち主の象徴という役割を持つようになったんです」と武蔵野美術大学の島崎さん。だから「その人は時に、椅子に特別の愛着や感慨を持つ」。

吉田茂の懐刀、白洲次郎は吉田が生前使っていた椅子を引き取り、革が破れかけても愛用していたという。そろそろ張り替えては、と椅子職人の宮本さんはある時尋ねた。「吉田さんの汗のしみこんだ椅子を張り替えるとは何事だと叱られましてね。同じ革のまま使い続けられるように一日革を剥がして裏打ちをして補修しましたよ」。1980年ごろの話だったのだろうか、と宮本さんは振り返る。思い入れある椅子を使い継ぐ文化は欧州には根付いているが、当時の日本では珍しかっただろう。だが椅子生活が定着し、こうした文化は日本でも広がってきた。

東京・目黒の「Vise」に入ると、ミッドセンチュリーの名作椅子やクラシックなビロードソファが並ぶ。一見おしゃれなアンティーク家具店だが、12年のオープン以来ここで家具は売っていない。「むしろこれから求められるのは家具を直す店なんじゃないかと思うんです」。

「50年前くらいに買った家具を、ご本人やお子さんが直しに来る例が増えています」と西原さん。店では張り替えなど補修だけでなく、テーブルのサイズを部屋に合わせて作り替えたりと、家具を使い継ぐための相談に応える。

さいたま市の建築士、永峰麻衣子さんは今年に入り、軽井沢の別荘で愛用する革張りのラウンジチェアを西原さんに補修してもらった。購入して50年、土台の木まで裂け始めたが「できるだけ元の雰囲気のまま補修してもらえないかと相談したんです」。裂け目は特殊な材料で接着、欠けた部分は似た材質

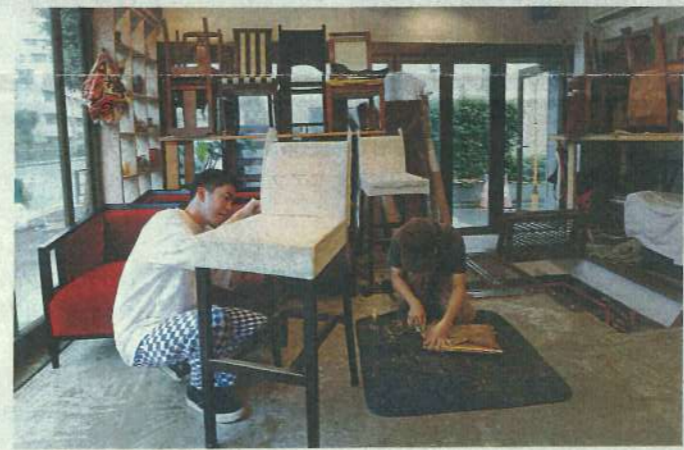
の木を埋め込み、最大限原型を残した全体補修が行われた。

椅子はもともと永峰さんの祖父のものでした。幼いころ学校から帰ると、仕事を終えた祖父は椅子に横たわり庭を眺めていた。祖父の死後、椅子は父が受け継ぎ、軽井沢の別荘に移された。父もまたテラスで眼前の緑を見上げながら、コーヒーを片手に椅子と共にあった。今また自分も少しは別荘を訪れ、仕事のことなどつらつら考えながらこの椅子に身を沈める。「祖父も父もいろんな悩みとともにこうやって心を休めていたんだなと、自分も年をとるにつれしみじみ思っています。元気があった祖父や父を一番近くに感じさせてくれるのがこの椅子なんです」。

座るための道具にとどまらない、椅子との深い関係。それは使い継がれた椅子との間だけにあるわけではない。

「生まれてくれてありがとう。君の居場所はここにあってからね」。こんなメッセージと共に贈られる椅子がある。元北海道副知事の磯田憲一さんを中心にした「君の椅子」プロジェクトは、子供が生まれた際にその子の名前を入れた椅子を職人に手作りしてもらい取り組みだ。自治体が地域で誕生した新生児に贈ったり、個人が自分の子や孫にと注文したりする。

「赤ちゃんの頃からこれが自分の椅子だって意識があったみたい。常に生活の一部でした」。東京都内に住む中西晴香さんの長男、創一朗君(3)と弟の悠



〔写真上〕椅子でくつろぐ永峰麻衣子さん。普段はテラス、肌寒い時はストロフの前が定位置(長野県軽井沢町)。(同左)「Vise」の店頭で椅子修理を手掛けるスタッフら(東京都目黒区)

二朗君(3)は、晴香さんの父からこの椅子を贈られた。絵を描く時テレビを見る時、兄弟の定位置はそれぞれ「君の椅子」だ。

そんな椅子が昨年、1カ月ほど家から消えた。かんしゃくを起した創一朗君が座っていた椅子を投げ、座面から真つ二つに割れてしまったのだ。「びっくりしたし悲しかったし、しばらく弟の椅子を借りたりしたんだけど、やっぱり他の人の椅子はちょっと違うんだよね」と創一朗君は振り返る。幸い椅子は制作者のもとで修理され、中西家に戻ってきた。「自分が座る場所があることは子供に安心を与えてくれる。その椅子を壊してしまったことで息子もまた成長したし、家族の椅子への愛着も深まりました」(晴香さん)。

プロジェクトは支持を広げて15年目を迎え、これまでに4千近い椅子が作られた。「中学生の子にとってはもう椅子の役目は果たさないとすかね。物を飾るなど、別の姿で家の中にあるみたいですよ」と磯田さん。そのうちに椅子の存在は意識されなくなるかもしれない。「それでいいんです」と磯田さんは言い切る。「生きていけばいい時はかりじゃない。その時傍らの椅子が目に入り、自分の生を喜んでくれた人たちがいたことを思い出してもらえたら」。椅子は持ち主の体ではなく心を支えるよりどころとなるはずだ。